

全科協 News

vol.54
NO.6

特集

インクルーシブミュージアム



CONTENTS

- P2 ●特集
- P10 ●海外博物館事情
- P12 ●11月12月の特別展等
- P14 ●リニューアル情報
- P16 ●トピックス

JCSM

Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718

東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9171 FAX 03-5814-9898

<https://jcs.jp/>



インクルーシブミュージアム



2022年ICOM(国際博物館会議)において採択された新しい博物館の定義には「accessible and inclusive(誰もが利用でき、包摂的で)」というキーワードが盛り込まれた。これまで以上に多様な主体への配慮が求められる時代となり、どの館園もインクルーシブな博物館を目指す必要性は認識しているだろうが、その取り組み具合はというと、館園ごと、あるいは職員ごとにも温度差があるように感じる。熱意はあるものの、具体的にどう取り組んでいったらわからない、技術や予算が伴わない…といった場合もあるだろう。

本特集は、インクルーシブミュージアムとは何かを改めて考え、配慮が必要な方に向けた具体的な取り組みの実例を広く知っていただきたいと考えて企画した。インクルーシブミュージアム代表の安曾氏には、インクルージョンやアクセシビリティを取り巻く現在の状況、館の姿勢や館内部のあり方を問う話題、そして科学博物館が持つ「社会を平等にする力」についても触れていただいた。耳の痛い話も多いかと思うが、ぜひ我が身を振り返る機会としていただきたい(もちろん上司の机の上にそっと本誌を置いていただいても!)。乃村工藝社の佐竹氏には、日本科学未来館のアクセシビリティラボにおける事例をご紹介いただいたが、実証実験を通じた開発プロセスは他の館においても参考になる事例だろう。埼玉県立川の博物館のスタッフの方々が集まり重ねてきた交流、研修、実践の中から生まれてきたセンサリーマップ作りの経緯は、ぜひとも見習いたい地に足のついた取り組み。そして「博物館を子どもたちの社会資源に」を目指して発達障害のある子どもたちと博物館をつなぐ「てこぼさんとはくぶつかん」の活動は、多くの博物館関係者にとって示唆に富むものではないだろうか。

本特集が、自身が所属する館園が今後進んでいく方向性を探るきっかけとなれば幸いである。「誰もが利用できる、包摂的な博物館」が増えていくことを願って。

神奈川県立生命・地球博物館 主任学芸員 石浜 佐栄子

本当のかわいい科学博物館を作ろう!

インクルーシブミュージアム
安曾 潤子

インクルージョンやアクセシビリティは、博物館の専売特許?

「ダイバーシティ(多様性)」、「インクルージョン(包摂)」、「アクセシビリティ(誰もが利用できる)」は、2022年に国際博物館会議(ICOM)の「博物館の定義」に含まれたことで、日本の博物館でも注目されるようになったのは良いことです。しかし、これらは本来、図書館、学校、会社など、あらゆる場で実践されるべきもので、博物館に限った話ではありません。

“障害”^[1]のある人のアクセシビリティに関して言えば、日本ではすでに「障害者差別解消法」^[2]があり、博物館の大多数を占める地方公共団体立の館では、「合理的配慮の提供」は、8年前から「義務」なのです。私がこの義務の存在を知った10年ほど前、全国の館でこれらに関する知識が必要になるだろうと思い、コンサルタントとして独立したのですが、依頼殺到というわけではなく、あれれ?今年4月の改正法施行により、民間事業者にも「合理的配慮の提供」が義務となったことで、ようやく自分事としてとらえる館が増えてきた、という感じでしょうか。

その証拠に、博物館スタッフからは、「負担だ、難しい(からできない)」という意見を、未だによく聞きます。私自身、大・小規模、地方・都市と様々な館で働いた経験があるので、そう言いたくなる状況はよくわかります。しかしながら、小さな飲食店でも義務、というのが今の日本。博物館が「新しい役割」と謳って、社会の先を行っているわけではなく、“障害”のある人が利用できるようにすることは、最低限の責任です。「(お金や人がないから)うちでは難しいよね」といって先送りにする選択肢はなく、「どうやってやるか」を考える段階にきているのです(もちろん、「過重な負担」となるようなことはしないで良いのですから)。

科学博物館は社会を平等にする力(視点)を持っている

日本の博物館では、バリアフリー、ユニバーサルデザインの流れから、“障害者”への対応だと見なされがちですが、世界の博物館では、外国人、外国にルーツのある人、人種、宗教、民族、身分制度、性的マイノリティ(LGBTQ+)、ジェンダー、子ども(乳幼児)、高齢者、貧困など、より広範な状況や属性を考慮しています^[3]。

ちなみに、これらの「マイノリティ」は「少数派」、マジョリティは「多数派」と訳されることが多いですが、単なる人数の問題ではありません。マジョリティは「気にしないでいられる人」(ケイン樹里安、2019)^[4]と考える方が実態をイメージしやすいかと思います。

科学博物館は、身体に“障害”のある人へのアクセシビリティ(バリアフリー)以外でできることはない、と思われるかもしれませんが、そうではありません。例えば、ロンドン自然史博物館(Natural History Museum)ではSNSを通じて、国立自然科学博物館(台湾)ではガイドツアーによって、LGBTQ+が自然界でよく見られることだと紹介しています^[5,6]。また、科学館関係者には有名なサンフランシスコにあるエクスプロラトリウム(Exploratorium)では、閉鎖された精神科病院に残された私物から、(時代によって変わる)「普通とは何か」を子どもたちに問う展示を行っていました^[7]。みなさんが扱う「自然科学」で、社会の偏見を解消する取り組みはいくらでもできるのです。

最近、博物館関係者から「やっぱり対面がいいよね」という声をよく耳にします。コロナが収束しても対面(来館)では参加が難しい人がいる、ということに、どれくらい館が思いをはせているのでしょうか?館内のバリアだけでなく、コロナ禍の経験をいかして「気にする人」になってほしいと願っています。

「追加のサービス」ではなく、館の「姿勢」が問われている

インクルージョンやアクセシビリティは「社会の構造的な不平等の解消」、つまり「博物館自身が生み出している不平等をなくしていくこと」であり、単なる「利用者サービス」ではありません。日本の博物館では、この認識の欠如から「追加の負担」と考えられ、現場担当者に任されている（というより、「気にする人」だけが奮闘している）ことがほとんどで、その証拠に、私へのご相談で多いのは「上司が理解してくれない」です…。

一方、ICOMのインクルーシブ研修^[8]では、「リーダーシップ」や「ガバナンス」、「倫理」に多くの章がさかれています。設備や対応だけでなく、コレクションポリシー、調査・研究、展示やHPに使うイラスト、講演会の人選、ショップのグッズ、減災、職員・ボランティアスタッフの多様性まで、館の全てに関わることなのです。

例えば、オンライン予約で「男・女」のどちらかを選ばないと進めないシステムを見かけたことがあります。その館は誰かを排除している（インクルージョンの逆）つもりはないかと思いますが、マイノリティからはそうは見えません。

また、先に述べたように、合理的配慮を提供しないことはコンプライアンス問題で、一部署、一担当者が背負うことではなく、館の姿勢が問われているのです。

私自身、館全体の理解を得るために多くの時間を費やした経験があるため、トップマネジメントが読んでくださることを願ってこの文章を書いています（現場の方は、上司の机の上にこのニュースをそっと置いてください）。

最近、リニューアルや企画展で、「映える」ことを意識した展示を見かけます。しかしながら、観光業に携わることを目指して全国を旅している「障害」のある若者が、「新しくできた展示なのに、日本語字幕がなくて楽しめなかった」と伝えてくれたことがあります。本当にかっこいいのはどのような館なのか、様々な面から考えてほしいと思っています。

館自身のダイバーシティ&インクルージョン (D&I)

「開かれた」博物館と言われて久しいですが、D&Iやアクセシビリティに関しては、博物館が「してあげる側」で、マイノリティは外にいる、という認識での「開かれた」がほとんどのように思います。

「合理的配慮」も「配慮」と訳されたために、館が一方的に準備して提供すると誤解されがちですが、本来は「どのようなサポートが必要か」と「館ができること」を話し合った上で提供されるという「(対等な)コミュニケーション」を重視しています。スタッフのみなさんは、「完璧な準備をしなければ」と気負うことが多いですが、「ダイバーシティ」と言われるように、それぞれのニーズをすべて把握しておくことは不可能です。多様な人と出会い、一緒に利用・参加しやすい館を作っていく、そのプロセスがインクルージョンなのだと思います。

そして、どんなにマイノリティをウェルカムする気持ちがあっても、対応する人が全員マジョリティでは疎外感ほぬぐえません。細かな配慮よりも、スタッフ・ボランティアに多様性がある方が、よほど「自分の居場所だ」と感じることができると思います。

「障害」のある大学生（学芸員課程ではない）から「〇〇（生物）が好きだから本当は博物館で働きたかったけれど、「障害」があるから無理だと思ってあきらめた」と伝えられたことが

あります。みなさんの館は、「ぜひどうぞ」と思っておられるかもしれませんが、この学生のここ十年ほどの博物館体験で「自分でも“障害”があっても大丈夫、博物館で働ける」とは感じられなかったということです。

ルーブル美術館では、視覚に“障害”のある7歳の子どもが展示を案内するツアーを実施しました。これは、マジョリティに新たな「見方」を提供するだけでなく、マイノリティが「自分もできる」という感覚を持つためのエンパワーメントでもあります^[9]。ロシアの博物館では、館全体の仕事を知的に“障害”のある大人にもわかりやすい方法（例えば、文字ではなく絵を使用するなど）で伝えるプログラムを実施し、その後、彼らにイベントの補助をしてもらっているそうです^[10]。マイノリティは人から何か「してもらう」ことが多くなりがちですが、自分で何かすることによってウェルビーイングは高まる、ということも忘れてはいけないと思います。

さて最後に、みなさんの館で決定権のある人（管理職）は、3割以上“女性”ですか？子育てや介護をしている人は性別関係なく働きやすいですか？非正規（任期付き）職員等、博物館自身が生み出している「マイノリティ」もいます。また、私がスタッフ全員にインクルーシブ研修を実施した後、「LGBTQ+について話してくれて嬉しかった」と伝えてくれた人もいます。社会に向けた偏見解消以前に、「異性を好む」や「家父長制」前提の会話しかない職場はまだ多いと思います。

「ダイバーシティの本質とは、社会の中でまだ声を上げられていない人たち、代表とされていない人たちが誰なのかを見極め、考える姿勢のこと。」（アビド・フセイン、2018）^[11]。「気にしないでいられる」同質人だけでは、インクルーシブミュージアムは作れません。「お客さん」ではなく、あなたの隣にいる人として、マイノリティが発言できる環境にあること、これが本当に開かれた館につながるのだと思います。

- [1] 字数の関係で、医学モデル、社会モデルでの「障害」を説明することができなかったため、一般に思われている（医学モデルでの）障害をダブルクォーテーションで囲むだけのこと、ご容赦ください。
- [2] 正式には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」
- [3] Eleventh International Conference on The Inclusive Museum (2018年) で発表されていた内容と [8] の研修が取り上げていたトピックより。
- [4] ケイン樹里安他、2019年、「ふれる社会学」、北樹出版
- [5] X (Twitter) に複数投稿しているので、以下のURLはその一つです (2019年)。
https://x.com/NHM_London/status/1134766171805409280
- [6] 謝文馨、2022年、「大自然中也有LGBT? 科博館主題導覽帶你探索多元的動物性生活」、中華民國文化部、
<https://museums.moc.gov.tw/Notice/NewsDetail?id=9f17ee79-c09f416f-b904-53d2350010e9>
- [7] 2013~2014年に行われた展示で、タイトルは「The Changing Face of What is Normal : Mental Health」
- [8] ICOM、2021年～、「Creating Meaningful and Inclusive Museum Practices」、
<https://icom.museum/en/news/icom-mooc-inclusive-museum-practices/>
- [9] Agnès Chevallier and Alexandra Verdeil、2018年、「Making Museum Exhibits Inclusive: The Importance of Design for All」、Eleventh International Conference on The Inclusive

Museum

- [10] Lada Talyzina, 2018, 「Career-oriented Training Courses for People with Intellectual Disabilities: The Garage Museum of Contemporary Art's Experience in Moscow, Russia」, Eleventh International Conference on The Inclusive Museum

- [11] 水島七恵、2018年、「アーツカウンシル・イングランド ダイバーシティ担当ディレクター、アビド・フセイン氏 インタビュー」、ブリティッシュ・カウンシル（日本）、
<https://www.britishcouncil.jp/programmes/arts/topics/diversity-arts-council-england>

見えない方も、だれもが楽しめる展示体験を目指して — 日本科学未来館アクセシビリティラボでの実証実験の報告 —

株式会社乃村工藝社
oto rea(オトリア) 開発チーム
佐竹 和歌子 中村 瞳
村上 萌 渡邊 創

科学館や博物館などミュージアムは、文字や画像、映像など視覚的な情報にあふれています。本来ミュージアムは、だれにでもひらかれた場所である一方、視覚優位の情報コミュニケーションが社会の標準である以上、見えない方にとってミュージアム体験が限られたものになってしまう事は否めません。視覚に頼らなくても、新しい発想による空間創造と技術力で、見えない方も楽しめる展示体験をつくることのできないか。そうした問題意識のもと、昨年度から乃村工藝社は、日本科学未来館が推進するコンソーシアム型研究室「未来館アクセシビリティラボ」に参画し、視覚障害者の未来の生活を支える技術の研究開発を様々な専門機関と共同で取り組んでいます。

空間に「音」を配置することで空間体験を拡張する 音響体験装置 [oto rea(オトリア)]

乃村工藝社では、2020年コロナ禍時からリアルな空間において非接触でも楽しめる体験のひとつとして、音のMR (Mixed Reality) 技術の開発を行う株式会社GATARIとサービス開発に取り組んできました。そのサービスがGATARIが提供する「Auris(オーリス)」というシステムをプラットフォームにして、空間の特定位置に音声情報を配置し、体験者の位置や行為にあわせて、あたかもそこにスピーカーが存在するかのようには音を再生する「oto rea (オトリア)」です。体験者はスマートフォンを首から下げ、空間を回遊すると、聞こえてくる音の世界に没入しながら空間を楽しむことができます。しくみは、VPS (Visual Positioning System)とVIO (Visual Inertial Odometry) から構成される独自のトラッキングシステムによってスマートフォンの画像から体験者の位置や向きをリアルタイムに認識し、事前に配置設定した音を再生します。従って、利用者側で操作する一般的な音声ガイドとは異なり、利用者の動作行為にともなった体験や演出が可能になります。そこで、オトリアを視覚に障害のある方の展示体験に活かすことのできないか、試行的に体験プログラムを開発し、実証実験を行うことから始めてみることにしました。

実証実験コンテンツ：音と手でさぐる新展示 「プラネタリー・クライシス」

オトリアで制作するコンテンツでは、既存の展示空間に音を配置することで、目には見えないけれど音も展示の一部となります。音による情報がアクセシビリティの面で、展示間のスムーズな移動や展示体験の誘導ナビゲーションとして有効に機能するのではないかと仮説を立てました。

実験対象とする展示エリアは、昨年公開された地球環境がテーマの新常設展示「プラネタリー・クライシス」のゾーン2「変わる地球の今に触れる」の一部としました。本展示エリア



新常設展示「プラネタリー・クライシス」

には、ハンズオン展示として、利用者が実際に触って理解することができる展示も複数配置されています。また、展示空間自体も特徴的で、地球環境に配慮した木材でつくられた展示什器で構成されています。空間の特徴とそのコンセプトもあわせて体感してもらうことを狙いとしてきました。コンテンツ構成は以下となります。

①イントロダクション：

体験方法の説明と展示エリアの概説（開始位置）

②体験1：「進行する気候変動」

触れる展示は、ここ200年ほどの世界の平均気温の変化を示す半立体折れ線グラフ。音声は、体験誘導と解説、車のエンジン音など体験にあわせた効果音の音響演出。グラフと音声を通して、近年の平均気温の急上昇と人間活動の影響を実感する。

③体験2：「今が将来へのわかれ道」

触れる展示は、温室効果ガスの排出量によって異なる海面上昇の高さの予測値を示す壁面木製盤面。音声は、体験誘導と解説、波の音など体験にあわせた効果音の音響演出。温室効果ガスの排出量が多いと、より海面が高くなることを感じる。

④体験3：「原因はわたしたち」

触れる展示は、木製のボールがたくさん入った複数のネット。ボールの大きさは人口あたりの排出量、ネットに入ったボールの総量は、ある国や地域の1年の二酸化炭素排出量を示している。音声は、体験誘導と解説。ボールの大きさとネットの大きさ、重さで、国や地域ごとの排出量の違いを体感できる。

⑤体験4：「木のベンチ」

展示内にある休憩スペース、木でできたベンチに座ってもらう。音声は、座る行為への誘導と、地球環境に配慮した展示制作の工夫を紹介。



体験1

体験2

体験3

体験4

体験は、立体音響を再現するイヤホン（実証実験当日はメガネ型オーディオデバイス）を装着し、スマートフォンを首から下げ、開始位置に立つことで始まります。装備のセッティングと開始位置までの誘導はスタッフが行いました。スマートフォンのカメラをふさがないことに注意してもらえば白杖をもって体験も可能です。①のイントロダクションの後は、イヤホンから流れてくる音声に従って体験者のみで移動します。誘導音は、向かうべき展示の方向から聞こえるようになっています。音の方向で次の展示の場所を示し、所定場所に到達したら効果音で知らせる仕組みです。ナレーションは、説明的になりすぎないことを意識し、問いかけや例示で興味をもってもらうこと、体験者の動きに合わせて徐々に理解が深まるようにすること、効果音やBGMによる多層的な演出で展示に親しみ、楽しんでもらうことを大切にしました。



体験時の様子

実証実験を通じた開発プロセス

実証実験の被験者は、未来館の公式ウェブサイトのイベントページから公募しました。1度目の実証実験では、参加条件を、視覚障害者（全盲）の方かつ、歩行に不安・困難の無い方、イヤホンによる音の聞き取りに困難のない方とし、コンテンツの内容から小学校高学年以上を対象としていることを明記し、事後ヒアリングに協力いただきました。

1度目の実証実験（2023年12月17日）は、老若男女6名の方が参加し、体験全体の満足度は、全員から「満足した」という回答で、下記感想が得られました。

- 触れる展示と音の組み合わせが、立体感があって効果的だった。海水面の上昇など自然の波音が聞こえて、答えを推測する上でのヒントになった。美術鑑賞やパネルの解説などにも応用できると思う。（20歳代・先天性障害）
- 普段は同行者に解説してもらおうことが多いが、同行者を疲れさせてしまう。同行者に合わせなくてもいいから助かる。このような展示体験をミュージアムでもっと増やしてほしい。（70歳代・中途障害）

移動や展示体験への誘導の効果性について、「音によるナビゲーションにより、スムーズに移動できましたか？」とい

う問いに対して、5名から「スムーズに移動できた」という回答が得られた一方、「音によるナビゲーションは全体として安心・安全だと感じましたか？」という問いに対しては、安心・安全と感じた被験者は1名でした。

- 「到着しました」の音声の後に手を伸ばすというナビゲーションについて、自分の行為があっているのか戸惑いを感じた。手を伸ばしても何も触れられなかったので、もう少し位置について説明が欲しい。（60歳代・中途障害）
 - 進む方向はわかるが、本当にそちらでいいのか疑問を感じながら進んだ。慣れたら大丈夫だが、音の方向の案内に加えて、前方の安全性などが知ることができると安心感が増す。白杖で足元は確認するので、先方の障害物の安全確認があると安心である。（40歳代・中途障害）
- 一般来館者も見学している中、周囲の状況がわからない状態で移動の不安感、また、触れる展示対象がどんなものなのかかわからない状態でのタッチポイントの正確性が、音声情報からだけでは心許ない状況であったことが汲み取れました。別の意見として以下のものがありました。

- 動線が決まっている体験も魅力的だが、体験するコンテンツを選べるようになっているとより楽しみが増える。どれを選択するのが、体験時間とともにセットされてほしい。展示をひとりでもわかっていてもわかりやすいものがあるといい。（40歳代・中途障害）
 - このような体験は初めてだったのでまた体験したいが、身長の設定が自動で認識してもらえると良い。高さや位置の目安も大人向けの案内だった。（10歳代・先天性障害）
- 自身のペースにあわせた体験や、選択型のコンテンツなど、より自由度が高い体験が期待されていることがわかりました。また、誘導については、「腰の位置の高さ」や「しゃがんで手をのばしてみてください」と、からだの部位で案内することについて、身長など決して一律ではないので、あらためて再考すべきであることがわかりました。

2度目の実証実験（2024年3月23日）は、上記の意見をふまえて、一部改良を加えて、対象者を弱視の方にもひろげて実施しました。主な改良のポイントとして、移動ルートを外れた時にアラート音を加え誘導の確実性と安心感を向上させることと、ルート選択機能を実装しコンテンツを選択する楽しみを付加することを検証しました。被験者6名のうち、半数が「安全・安心と感じた」と回答し、一定の有効性は認められた一方、「どちらともいえない」と答えた方が2名いるなど、混雑や周囲の障害物への不安軽減は今後の課題として残りました。選択肢を加えることでの自由度向上にも、好意的な意見が寄せられました。

今後に向けて一だれもが楽しめる展示環境を目指して

実験の被験者以外にも、ミュージアム関係者をはじめとしたさまざまな利用者に体験してもらい、「新しいミュージアム体験のひとつである」「文字を読むことが苦手な場合など、展示体験の違った楽しみ方になる」など意見をいただきました。音を展示の一部とするオトリアが、視覚障害者のアクセシビリティの向上に寄与するために、まだ改良を重ねる必要がありますが、その取り掛かりとなる可能性を示すことができました。さらに今後は、見えない方も見える方もその垣根を超えて、同じ空間をともに楽しめる展示環境の実現を目指して、音声×空間の新たな体験性を実装する研究開発に継続して取り組んでいきます。

誰でも楽しくなんでも体験できる博物館を目指して ～かわはくくにセンサリーマップができるまで

埼玉県立川の博物館

経営企画室広報企画担当 若目田 葉子
 交流員グループマネージャー 神保 敏子
 館長 小川 義和

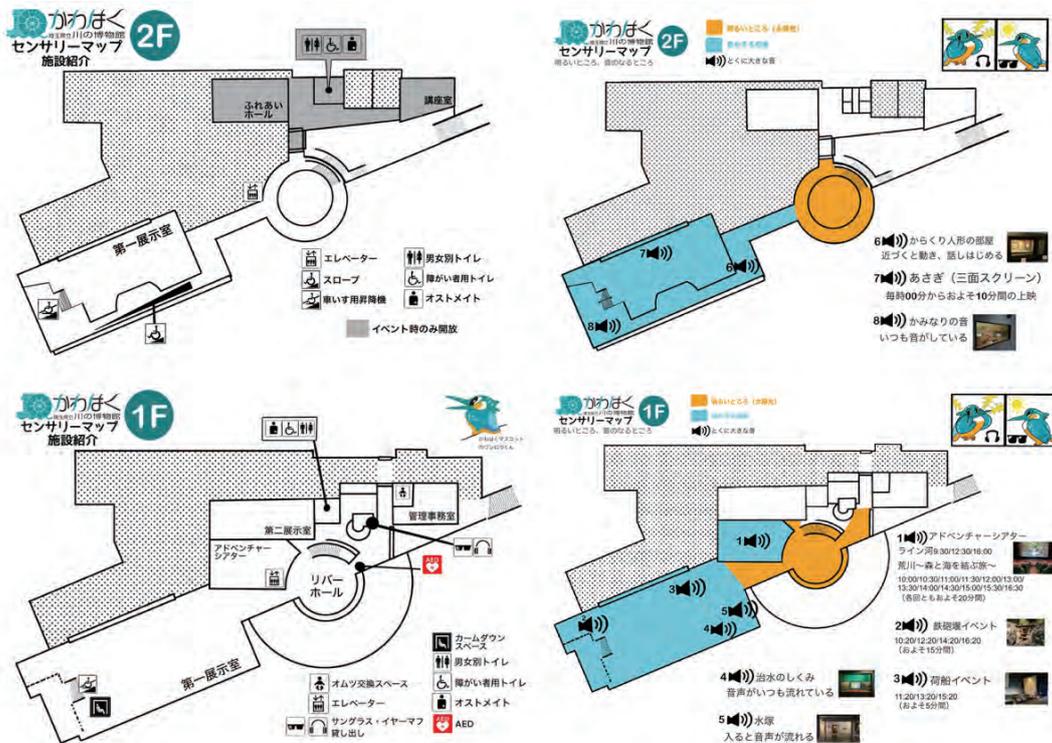


図1 かわはくのセンサリーマップ かわはくキャラクターのカワシロウも登場して楽しく分かりやすくなるよう心がけた

はじめに

みなさん、「センサリーマップ」(図1)って知っていますか。多くの人にとって何でもない館内照明の光の強さや館内放送の音量も、「感覚過敏」とされる人たちにとっては、耐えられない刺激になる場合があります。スマートフォンやパソコンの画面の光でも目に刺さるような痛みを感じたり、大きな音に恐怖を感じたりするので公共の場に出られず、博物館などに来られなくなることもあるといわれています。「センサリー(sensory、感覚の、知覚の)」のマップ(地図)というのは、つまり、このような感覚過敏の人たちに、館内のこの場所は光や音などの刺激が強すぎるかもしれないと知らせるためのものです。

障害者サービスを始めるきっかけとスタッフの心の研修とかわはくがしてきたこと

埼玉県立川の博物館(以下、かわはくと表記)が障害者サービスにかかわり始めたきっかけは、博物館の周辺にある深谷はばたき特別支援学校(深谷市)、熊谷特別支援学校(熊谷市)などの学童保育(放課後デイサービス)に通う児童、生徒がかわはくをしばしば利用してくれるようになったことです。知的障害や発達障害のある子どもたちにとってシアター設備やエレベーター、レストラン、店舗などがあるかわはくは、小さな街のようなもので社会を疑似体験するのに適しているからだったそうです。かわはくの展示案内をする交流員(ス

タッフ)の接客態度が優しいのも、利用頻度が高い理由だと聞きました。

一方で交流員は、これらの児童、生徒たちとどう接すればいいか、戸惑いを感じていました。交流員たちは子どもたちのことを知るために、2015年から放課後デイサービスに出向き、ボランティアとして児童、生徒とのふれ合いを始めました(図2)。また、寄居町社会福祉協議会の協力で介助サービス体験や手話、点字、車いす体験なども重ね、特別支援学校の教諭を招いて、「発達障害とは何か」などの研修も続けました(図3、図4)。

この研修の成果を踏まえ、研修結果を来館者にも体験してもらおうと、2017年から12月の「障害者週間」にあわせて、「障害者ウィークイベント ところとからだのバリアフリー～はくぶつかんたいけん～」のイベントを開催してきました。イベントでは、手話教室や車いす利用者の介助体験、自閉症の人が見ている世界を体験したり、介助犬と一緒に博物館を見学する体験、手話付き落語会、手話付きの展示解説などを行ってきました。

コロナ禍で人と接するイベントの開催が難しくなった時には、『みんなで展覧会』と題して特別支援学校の児童、生徒の陶芸、布製品、絵画など授業の中で作っている作品の展示会を開いたり、障害を持つアーティストのコンサートや映画会を開いたりしました(図5、図6)。

こうしたかわはくの活動を知った埼玉県障害者福祉推進課が2023年2月、感覚過敏の人たちへの配慮の時間を設ける



図2 放課後等デイサービス 児童クラブ スワンの森でのクリスマス会参加の様子



図3 器具を身に着け、高齢者疑似体験をしている様子



図4 聴覚障害を持つ講師による手話研修会の様子



図5 2022年の秩父特別支援学校に通う生徒・児童の作品展
かわはくの本館リバーホールでの展示の様子



図6 2022年の秩父特別支援学校に通う生徒・児童の作品展
第1展示室へ続く廊下にも作品を飾った。

「クワイエットアワー」の実施をかわはくで試みてもらえないかと依頼してきました。クワイエットアワーを実施するに当たって、埼玉県発達障害総合支援センター職員の方がかわはくを訪れ、館内を一緒に回って光がまぶしすぎるかもしれない場所や館内放送の音量が大きすぎるかもしれない場所を調べて回りました。その時、そうした感覚障害のある方にとってつらい場所をあらかじめ知らせるためにマップを作ろうと提案したのが、センサーマップ作りの始まりです。

センサーマップを作ろう

私たちが知っていたのは、エレベーターや車いすが通れるスロープがある場所などを示す「バリアフリーマップ」でした。「センサーマップ」の存在は、県の障害者福祉推進課の方から教えてもらいました。自分たちで調べてみると、国内では東京国立博物館にあることがわかり、海外の博物館ではシンガポール国立博物館や大英博物館のセンサーマップの事例なども参考にしてセンサーマップ作りを始めました。東京国立博物館のマップは広いフロアにある各コーナーを効率的に説明するためにマークや数字が多かったので、かわはくのマップではよりシンプルにし、光の強い場所、音の大きい場所への注意を促すこと、その音がいつから何分続くのかといったことに特化させ、文字は最小限にして1枚ですべての情報を載せられるものにすることにしました。音に気をつける場所はブルーで示し、明るさはオレンジ色にすることで気をつける場所をより分かりやすくするよう心掛けました。マップは2023年11月の「障害者ウィークイベント」に合わせて完成させました(図1)。

感覚過敏を持つ子どもは過度の刺激を受けると、パニック状態に陥ることがあります。かわはくではそうした状態になった子どものために、気持ちを鎮める「カムダウンコーナー」を設け、その場所もセンサーマップに示しました。この他、1階と2階を行き来する車いすの昇降機のある場所、スロープなども示すようにしました(図7)。

2023年の障害者ウィークでは8日間の期間中、「クワイエットアワー」として、館内放送をすべてやめ、スタッフが来館

者に直接声がけをする形をとりました。センサーマップは来館者に配布するとともに、拡大版を壁に貼り出してPRしました。音を遮るためのイヤーマフやサングラスの貸し出しコーナーも新たに設けました(図8)。



図7 2023年の障害者ウィークイベントでは、介助ボランティアと一緒に車いすです博物館を見て回る「車いすです博物館を見て回ろう」のイベントを行った。展示室にある昇降機を使い、車いすのまま2階から1階へ下りたり、展示が車いすに乗って見学するとどう見えるのかなどを体験し、最後にワークショップで気づいた点をマップにまとめた。昇降機の脇には、段ボールで作った「カムダウンコーナー」がある。



図8 本館入口に設置したイヤーマフとサングラスの貸し出しコーナー

おわりに

センサーマップを作ったからといって、障害を持つ子どもやその関係者から反響があったかと言えば、まだ特にそうしたものはありません。ただ、博物館スタッフの中にはちょっ

とした変化がみられました。「実は私も大きな音にびっくりしたり、強い光がつらいと思ったりすることがありました」と話してくれるスタッフが出てきて、多くのスタッフがこうしたことに辛さを感じる人たちのことを理解し、どう接したらいいかを自分事として考えるきっかけになったのではないかと思います。

せっかく作ったマップですから、常日頃から博物館を使ってくれている特別支援学校の児童、生徒にマップに関するアンケート調査をしてより良くしていきたいと思います。

かわはくは「川を見る、川を感じる、川を知る、体感する博物館」です。障害者の人たちも川に関する様々なことを体

感できる博物館になるよう、努力していきたいと考えています。

かわはくでは、2024年も11月6日(水)～17日(日)に「障害者ウィークイベント ころとからだのバリアフリー～はくぶつかんたいけん～」を開催します。期間中、クワイエットアワーを開催するとともに、『みんなで展覧会』深谷はばたき特別支援学校に通う生徒・児童の作品の展示をします。11/10には映画「みんなの学校」の上映会を、11/17には特別支援学校に通う生徒と卒業生による「スマイルいっぱい 野外ライブ」などをを行います。百聞は一見に如かずといえます。この機会に埼玉県立川の博物館に来て、イベントに参加してみませんか？お待ちしております。

博物館×福祉のタッグで発達障害のある子どもたちと博物館をつなぐ

一般社団法人てこぼこ／株式会社ノブカントリー

竹村 望

一般社団法人てこぼこ／NPO法人大阪自然史センター／なにわホネホネ団

西澤 真樹子

本年4月、改正障害者差別解消法の施行により「合理的配慮の提供」が法的義務化されたことを受け、公立・民間問わず、様々な施設が対応に取り組みつつある。しかし、発達障害や精神疾患などの障害は外から捉えにくく、さらに個人ごとに多様で、どのような配慮を行えばいいのか、何から手をつけたらいいのか捉えあぐねているのが現状だろう。ここでは、その手がかりとして、博物館の一サークルから派生した団体が、発達障害のある子どもたち(以下、子どもたち)と博物館をつなぐために手探りで進めてきた4年間の活動を紹介する。「てこぼこさんとはくぶつかん」は、2020年に発足した。「博物館を子どもたちの社会資源に」を目指し、福祉関係者と博物館関係者の協働のもと、主に4つの活動①職員や警備員などすべての博物館関係者が参加できる研修会②自然を学ぶ五感を使ったプログラムの実施③当事者が理解しやすいパンフレットやサインの作成④これらの活動を社会に発信する、に取り組んでいる。

現在、博物館・福祉のルーツを持つメンバーが半々の構成となっており、標本作成ボランティア、学生、アーティスト、作業療法士、精神保健福祉士、理学療法士、発達障害の当事者や当事者家族など、約30名が所属している。

活動名の「てこぼこ」は、得意なことと不得意なことの差が激しい発達障害を凸凹がある、と表現することに由来している。「発達障害児者」よりも、「てこぼこさん」。可愛い愛称は、私たちの博物館に来て欲しいという前向きなウェルカム感も表現している。



活動のきっかけ

きっかけになったのは、西澤が所属する大阪市立自然史博物館の標本作成サークル「なにわホネホネ団」に、精神保健福祉士である竹村(現代表理事)が入団してきたことだった。骨格のクリーニングを進めながら「自分の興味関心に集中しやすい発達障害の子どもたちにとって、博物館はすごく幸せな空間だ」と言い出した。竹村は精神疾患や精神障害のある人が住み慣れた地域の中で自分らしく暮らすための助言や情報提供を行う相談支援専門員の仕事をしている。だが、博物館を社会資源^{※1}として認識している福祉関係者には出会ったことがほぼないという。西澤は、刃物を使い危険も伴う標本づくりの作業で、どんなに口で言ってもうまく伝わらず、注意事項を守りにくい参加者に悩んでいた。また、この頃、熱心に博物館に来ているが、人との距離が掴めずにスタッフや警備さんをちょっと困らせてしまっている子の存在が気にかかっていた。「発達障害」という、情報の入り方に特性がある障害の存在をはじめ知ったことで、博物館が様々な子どもたちを受け止め、また、標本作成活動を長く続けていくために、これらの障害について学ぶ必要性を感じた。

博物館は、図書館と同じように生涯利用できる「社会資源」であるにも関わらず、当事者にも、その家族にも、支援者にも、その存在が周知されていない。また、博物館側には受け入れノウハウがなく、地域の資源が生かされていない。活動資金としてドコモ市民活動団体助成を申請し、「博物館を子どもたちの社会資源に」を目的に、博物館側と、子どもたち&その支援者たちのギャップを埋める活動が始まった。

※1 福祉ニーズを充足するために活用される施設・機関、個人・集団、資金、法律、知識、技能などの総称

きしわだ自然資料館への聞き取り

活動開始にあたり、きしわだ自然資料館(大阪府)へ、すでに始められている取り組みの聞き取りに伺った。放課後等児童デイサービス(以下、児童デイ)の利用が最近増えてきたことから、特別展の案内チラシの送り先に大阪府下の児童デイの一覧を含めたところ、新規の利用団体が増えた。同封された招待券で引率者が下見に来やすくなるだけでなく、歓迎されている印象も持つようだ。地域の方が受付に入られていることもあり、うまく情報共有がなされていて館内の対応

も全体的に暖かく、来館した子どもが「ここはずっといても、怒られないね」と喜んでいたという。障害者は手帳があれば無料で入館できるが、それだけでは「行っても迷惑をかけるかも」という来館のハードルは下がらない。招待券とチラシ配布は、すぐにでもできる歓迎の意思表示なのだと感じた。

博物館関係者向け障害の基礎研修

合わせて取り組んだのは研修の実施だ。発達障害は2011年に初めて改正障害者基本法に加えられた比較的新しい言葉であり、馴染みがない人も多い。研修には総括的な支援組織として全国106カ所に設置されている「発達障害者支援センター」の派遣事業を利用した。第一回は対面で実施した研修だが、コロナ禍で制限が増え、第二回からはオンラインで障害のある人の認識を体験するワークを含めた「当たり前のことほど難しい—数量理解から見える私たちの認識過程—」（講師：矢ヶ崎響氏）を実施した。また、博物館関係者には心優しく、親切で熱心なスタッフが多いため、障害のある子どもたちに対面した時、対応できない自分に必要以上に罪悪感を感じたり、逆に過剰に対応しすぎてしまったり、熱意が受け止められないことに苛立ちや怒りを感じやすいのではと考え、息の長い支援者になるための講座「博物館関係者のためのアンガーマネジメント」（講師：渥美正彦氏）も実施した。また、福祉関係者に博物館の可能性や利用の障壁について直接質問できる機会を作るため、「博物館のひらさかた—合理的配慮ってなんだろう？—」（講師：勝井操氏、太齋京子氏）も実施した。

五感を使った子どもワークショップの実施と成果

①さわってみよう ウシのホネ

2020年が丑年だったことから、博物館資料に親しむことを目的に、スイギュウなどウシの仲間の頭骨を触って観察し、ステンシルでウシの形を擦り出してエコバッグを作った。学芸員と資料の扱い方について事前に打ち合わせ、当日は「指一本でそっとさわる」をルールにした（指一本なら持ち上げられず力も加わらない）。他にもカラーガムテープを使った部屋のゾーニングや、時計の設置、「お話」「観察」「工作」「おしまい」とタイムテーブルを書き出し今どの段階にあるかわかるようにした視覚支援が非常に有効とわかった。子どもたちはしっかりルールを守り、集中力も持続した。

②のぞいてみよう カレーのせかい

子どもたちに身近なカレーが、どのような植物の葉、種、実でできているのかを、実際のスパイスを手にとったり潰してにおいをかいだりして顕微鏡で観察し、スパイスで万華鏡を作るプログラム。感覚のチャンネルをたくさん用意することを意識し、耳からの情報だけでなく、視覚・嗅覚・触覚で楽しむことができるよう工夫した。また、気持ちが乗らないと時間通りには参加できない子どもたちのために、大まかな作業の流れだけを決め、一定時間中は自由に参加でき、時間の制限もなく遊べるようにした。

子どもたちが工作をしている間、付き添いの大人は同じ部屋で「大人のミックススパイス作り」を体験した。



これは子どもから気持ちを一瞬解放して、自分のために時間を使いリラックスしてもらおう「家族支援」の考えに基づいている。

家に帰ったらお互いの体験を思い出しあえるよう、プログラムの内容をまとめたぬり絵のプリント「カレーのせかいおたのしみブック」を渡した。カレーというテーマは、子ども食堂を行う地域の支援団体との共催だったため、支援物資として必ず入っている食材だから選んだ面もある。

これらのアウトリーチ活動を通じて、子どもたちが安心してイベントに参加できるための条件を探り、地域の当事者との関係を育てながら、博物館を利用しようとする際の障壁についての情報収集ができた。これは活動開始時期がコロナ禍と重なり、博物館での活動ができなくなり仕方なくはじめたのだが、地域のお寺や子ども食堂、区の社会福祉協議会とのつながりが生まれ、これまで一度も博物館に来たことがない、存在すら知らない家族や子どもたちと出会う結果となった。大きな声が出てしまったり、光や音に過敏であったりする子どもたちには『博物館は難しそう、静かにしなければいけなさそう』などのイメージがありハードルが高い。また、経済的に困難で博物館どころではない家族にも、来館のハードルは同じく高い。私たちが当初想定していた、イベントを博物館で準備して待っていれば来てくれると考えるのは甘いのだと気付かされた。アウトリーチ活動を通して、地域で文化的な支援を必要としている人たちが具体的にどんな状況にあるのかについてリサーチし、情報提供をしてくれる協力者と出会うことをお勧めしたい。

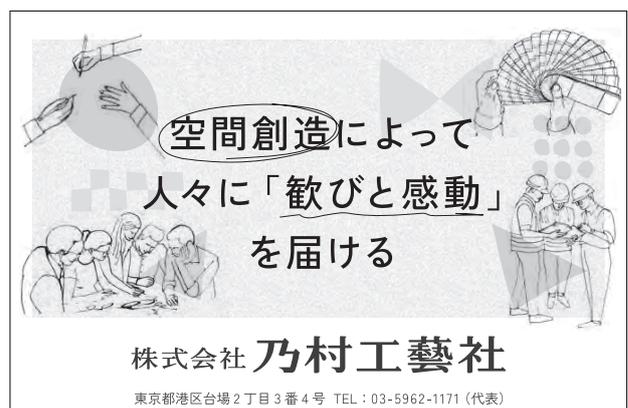
これからの活動

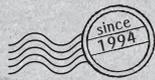
2020~2023年の間に開催した28回のワークショップでは、発達障害児に向けたプログラムの実施に必要な知見（スタッフの知識、広報の方法、事前準備、時間、人数、会場のセッティングなど）が得られた。今後は国立アトリサーチセンターの「合理的配慮のハンドブック」を参考にしながら、日本の博物館の多くを占める小規模園館を対象に、障害のある子ども達向けのプログラム運営ガイドとしてまとめる予定である。

何よりも楽しい場所である博物館。あちこちで小さな目標を掲げ、楽しみながらできることを進め、博物館を社会にひらいていってほしい。

Line : <https://lin.ee/mC0bU1E>

Facebook : <https://www.facebook.com/tekopoko/>





■ 新設館

スリランカのコロンボ大学に動物学博物館が開館 (2024年5月)

2024年5月18日に、スリランカ的首都コロンボ（都市圏人口：560万人）のコロンボ国立大学に、動物学博物館が開館した。同館は、スリランカにおいて、同じコロンボ市内にある国立自然史博物館（1986年設立）について、二番目の自然史系博物館だ。同館の自然史標本（約9千点）は、イギリスの植民地時代から約1世紀にわたって収集されてきたもので、サイからクジラ、海鳥からダチョウ、サンショウウオからカメまで、スリランカのさまざまな固有種と外来種が含まれ、また無脊椎動物のコレクションも、色とりどりの蝶や蛾、サンゴ、軟体動物などが含まれている。館長は、生物地理学が専門の Sampath Seneviratne 博士（動物学及び環境科学科教授）。Zoological Museum of the University of Colombo. Colombo.

<https://cmb.ac.lk/inauguration-of-the-zoological-museum>
<https://museum.zoology.cmb.ac.lk/>

■ 閉館

米カヴァナー航空博物館が閉館（2024年1月）

2024年1月1日に、テキサス州アディソン（都市圏人口：17,000人）のアディソン空港にあった、カヴァナー航空博物館が閉館した。同館は、1993年10月に実業家 ジム・カヴァナー氏の個人コレクションからスタートし、米国にあっては有数の民間コレクションまで成長した。収蔵品は、第一次世界大戦、第二次世界大戦、朝鮮戦争とベトナム戦争で使われた軍用機が、大部分を占めている。近年における、収蔵品の増加と運営費の上昇が、非営利団体による経営を圧迫し、加えてアディソン空港に支払うテナント料をめぐるトラブルから、閉館に追い込まれた。同館のコレクションは、とりあえず同じテキサス州の北部にあるノース・テキサス地方空港（テキサス州デニソン）に計画されている航空博物館に移される計画になっているが、新しい施設の開館時期は未定だ。

Cavanaugh Flight Museum. Addison, Texas.

<https://cavflight.org/>

<https://vintageaviationnews.com/aviation-museum-news/cavanaugh-flight-museum-to-close-after-30-years.html>

ミネソタ州の州立炭鉱公園が閉館（2024年6月）

2024年6月13日に、ミネソタ州北部のアイタスカ郡

（都市圏人口：45,000人）にある、博物館施設のヒルアネックス州立炭鉱公園（1988年設立）が閉館した。同園は、1913年に始まる鉄鉱石の露天掘りの歴史を紹介する施設として設立され、また鉄鉱石の採掘とともに発見されてきた白亜紀コールレン層に埋まっていたドロマエオサウルス等の恐竜化石の発掘プロジェクトを進めてきた。ミネソタ州政府の地下資源管理局によれば、閉館の理由は、かつて1978年に廃坑するまで、60年にわたって6,300万トンの鉄鉱石を産出してきた、ヒルアネックス炭鉱の操業を復活させるためだった。また、炭鉱の再生は、炭鉱公園があったカルメット村（人口：324人）とその周辺の地域経済を活性化させ、ミネソタ州の公立学校システムの発展にも貢献するとも言っている。

Hill Annex Mine State Park. Calumet, Itasca County, Minnesota.

<https://www.dnr.state.mn.us/news/2024/06/13/hill-annex-mine-state-park-permanently-closed-allow-mining-resume>

■ 常設展示

パリのシティ科学産業博物館、気候変動展示をオープン

2023年5月16日に、フランスの首都パリ（都市圏人口：1,240万人）にある、シティ科学産業博物館に、気候変動をテーマにした常設展「気候の非常事態」がオープンした。同展では、急速に進んでいる地球の気候変動の現状を紹介し、誰もが実行できる取り組みや解決策を提案している。また「脱炭素化目標を達成するために何ができるのか？」という難しい問いにも、答えようとしている。担当キュレータは、水文学と気象学が専門の Jean Jouzel 博士。

Urgence climatique.

Cité des sciences et de l'industrie. Paris.

<https://www.cite-sciences.fr/fr/au-programme/expos-permanentes/urgence-climatique>

米アメリカ自然史博物館、北米先住民族の常設展示を閉鎖・撤去

2024年1月24日に、ニューヨーク（都市圏人口：2,350万人）にある、アメリカ自然史博物館で、北米先住民族を紹介した常設展示ホール（「東部森林地帯」「大平原」）が閉鎖され、展示品が撤去された。閉鎖の決定は、2023年12月、米議会が北米先住民等の遺骨の返還等について定める、アメリカ先住民墓地保護・返還法（NAGPRA）の新規則の制定（2024年1月12日施行）を受けてなされた

処置だ。閉鎖された両方の展示は、1966年と1967年に公開が始まり、閉鎖されるまで、展示内容が更新されることがなく、ながく北米先住民の尊厳を傷つけるものであり、誤った理解を観覧者に与え続けてきた。

Eastern Woodlands. Great Plains.

American Museum of Natural History. New York.

<https://www.amnh.org/about/statement-new-nagpra-regulations>

<https://www.nytimes.com/2024/01/26/arts/design/american-museum-of-natural-history-nagpra.html>

■ 企画展・特別展

仏ドメヌ・デパルメンタル・ド・スコール博物館で、自転車の歴史展を開催

2024年6月21日に、パリ郊外のオー＝ド＝セヌ県のドメヌ・デパルメンタル・ド・スコール（都市圏人口：2万人）にある、ドメヌ・デパルメンタル・ド・スコール博物館で、自転車の歴史を紹介した企画展が開幕した。同展では、その起源から今日のスポーツやレジャー活動まで、長距離を移動できるエンジンなしの二輪車である自転車の歴史が紹介されている。展示品には、1863年にフランスの発明家のルイ・ギヨーム・ペローが考案した、蒸気機関を動力とする二輪車（1873年のウィーン万博に出品）も含まれている。会期：2024年12月31日まで。

Roues libres. La grande histoire du vélo.

Musée du Domaine départemental de Sceaux.

<https://domaine-de-sceaux.hauts-de-seine.fr/exposition-roues-libres>

米フロリダ州の科学博物館で、「最も動きが鈍い生物の生き残り作戦」展を開催

2024年6月7日に、フロリダ州フォート・ローダゲール（都市圏人口：614万人）にある、発見と科学の博物館で、「最も動きが鈍い生物の生き残り作戦」を紹介する特別展が開幕した。同展では、大きくて強く速い動物が食物連鎖の頂点に立つことが多い生物界で、生き残り、さらには繁殖するための戦略の一環として、スピードを落とすように進化してきた、見過ごされがちな種に注目します。ナマケモノ、ヘビ、カメ、ハリネズミ、タランチュラなどの生きた野生動物を間近で見ることができる。非常に動作が遅いにもかかわらず、何百万年も生き延びてきた動物に出会い、彼らの進化と適応の不可解な側面が紹介されている。一部の動物が他の動物よりも少ない食料を必要とする理由が紹介され、また捕食者から身を隠すユニークな方法も紹介されている。会期：2024年9月5日まで。

Survival of the Slowest.

Museum of Discovery and Science. Fort Lauderdale, Florida.

<https://mods.org/exhibit/survivaloftheslowest/>

独ピナコテーク現代美術館で、自転車のデザイン展を開催

2022年11月11日に、ミュンヘン（都市圏人口：600万人）のピナコテーク現代美術館で、自転車のデザインをテーマにした企画展「自転車：熱狂の対象・デザインの目的」と題した企画展が開幕した。同展では、自転車のデザインというテーマに初めてスポットライトが当てられている。自転車という交通手段が辿ってきたさまざまな発展の文化史ではなく、あくまでもデザインに焦点が当てられている。展示では、1800年代から2022年まで制作された、70点の独創的なデザインをもった自転車が紹介されている。これらは、ポール・ジャライ、ヘルマン・クラウエ、アレックス・モルトンなどの航空宇宙または自動車エンジニア、およびルイジ・コラーニ、リチャード・サッパー、マイケル・コンラッド、ジョルジェット・ジウジアーロ、マーク・ニューソン、クリスチャン・ザンブッティ、ロス・ラブグロブなどの工業デザイナーの手によるものばかりが一堂に集められた。レース用の四輪車、二輪車などを手がけた日本の富樫広樹氏が設計・製作したロードレーサー「TOGASHI 337B」（1989年）も観ることができる。真っ赤に塗られたカーボンモノコック形のフレームと両輪を備えた同車は、公式ウェブサイトで紹介（撮影：Kai Mewes）。会期：2025年4月1日まで。

Das Fahrrad - Kultobjekt Designobjekt.

Pinakothek der Moderne, München.

<https://www.pinakothek-der-moderne.de/ausstellungen/das-fahrrad/>

<https://www.pinakothek-der-moderne.de/wp-content/uploads/2022/10/5.-Togashi-Engineering-1989-scaled-1200x833.jpg>

<https://www.sterba-bike.cz/item/expo-the-bicycle-design-object-munich-germany?lang=EN>



トガシエンジニアリング製作のロードレーサー（1989）

Road racing bike, 1989, design: Togashi Engineering, manufacturer: Togashi Engineering, Japan. Loan from Reiner Balke. Photo: Die Neue Sammlung - The Design Museum [Kai Mewes]

List of special exhibition!

11月12月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
釧路市こども遊学館	青少年のための科学の祭典 釧路大会 サイエンス屋台村	11月3日
	クリスマス・スペシャル	12月14日～12月15日
岩手県立博物館	企画展「捕食者の献立」	9月28日～12月1日
秋田県立博物館	企画展「稲穂の詩 -秋田と米づくり-	9月28日～12月1日
山形県立博物館	東北の自然史大図鑑 - The Great Natural History of Tohoku -	9月28日～12月15日
高柳電設工業スペースパーク (郡山市ふれあい科学館)	ホワイエ企画展「望遠鏡と宇宙」	11月2日～2025年1月26日
	郡山市制施行100周年記念スペースパーク企画展「リアル謎解きゲーム」	12月7日～2025年1月13日
つくばエキスポセンター	企画展「たのしい図形 ふしぎな図形 すてきな図形の大集合」	11月16日～2025年1月26日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	ミュージアムパーク30年のありったけ -いつも茨城県自然博物館はおもしろい!-	11月2日～2025年6月1日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	ミニ企画展示「Skill is Magic! 技能五輪」	10月5日～12月1日
栃木県立博物館	とちぎテレビ開局25周年記念・栃木県立博物館第139回企画展「とちぎのキノコ」	7月20日～11月4日
	テーマ展「栃木の畑作～麻・麦・かんぴょう～」	7月27日～11月10日
	テーマ展「植物画の楽しみ～絵で感じるボタニカル今昔～」	10月5日～11月24日
	テーマ展「へびなんて、キライ!」	10月5日～2025年3月2日
	テーマ展「昔のこと知ってっけ?～道具を知れば暮らしが見える～」	11月23日～2025年3月30日
	企画展「死者と生者の古墳時代～下野における6・7世紀の葬送儀礼～」	12月14日～2025年2月2日
群馬県立自然史博物館	第70回企画展「北極と南極～いきものたちがめぐる海と陸～Season II」	9月14日～12月8日
川口市立科学館	科学の眼を持った天才 ～レオナルド・ダ・ヴィンチの発明と未来への夢～	12月14日～2025年2月11日
千葉県立中央博物館	二口善雄植物画展	10月12日～11月24日
港区立みなと科学館	2024秋の企画展 地球時間の旅 ～石ころから何が見える!?～	10月8日～11月24日
国立科学博物館	企画展「高山植物～高嶺の花たちの多様性と生命のつながり～」	7月30日～11月4日
	特別展「鳥～ゲノム解析が解き明かす新しい鳥類の系統～」	11月2日～2025年2月24日
	企画展「貝類展：人はなぜ貝に魅せられるのか」	11月26日～2025年3月2日
たばこと塩の博物館	嗅ぎたばこ入れ 人々を魅了した小さな容器	9月21日～12月22日
郵政博物館	秋期企画展「魔女の郵便局」	10月5日～12月15日
	巳年年賀状展	12月21日～2025年1月19日
日本科学未来館	バリ・ノートルダム大聖堂展	11月6日～2025年2月24日
サンシャイン水族館	帰ってきた♡性いっぱい展	9月6日～11月4日
多摩六都科学館	冬の特別イベント「ロクトロボットパーク2024」	12月25日～2025年1月13日
神奈川県立生命の星・ 地球博物館	30周年記念特別展「生命の星・地球博物館の30年 -120万点から厳選した資料で振り返る-」	7月13日～11月4日
新江ノ島水族館	“えのすい”のくらげ展	7月12日～11月4日
平塚市博物館	神奈川プラネタリウム大集合	9月28日～11月17日
	お家(うち)をまわる子育て地蔵	10月19日～12月22日
	中勘助と鳥、の物語	11月23日～2025年1月13日
富山市科学博物館	企画展「ふしぎいっぱい自然と科学」	10月26日～12月8日
	第32回「私の身近な自然展」	12月21日～2025年2月16日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開催館	展覧会名	開催期間
長野市立博物館分館 信州新町化石博物館	信州が海になったころ【前期】－南信州と西日本の海－	7月6日～11月10日
岐阜かかみがはら 航空宇宙博物館	月への挑戦－アポロ計画から50年、人類は再び月を目指す－	10月12日～2025年3月9日
	ドラえもん科学ワールド 空を飛ぶしくみ	12月7日～2025年4月7日
中津川市鉱物博物館	第42回私の展示室「まゆだまマユの森あそび～秋冬ものがたり～」	10月12日～12月22日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	企画展「山とともに生きる－南アルプスの麓、井川地区の今－／白旗史朗 南アルプス写真展」	7月20日～11月10日
	第7回ふじミュ－写真展	10月12日～2025年1月13日
	全地球史展	12月14日～2025年3月23日
静岡科学館 る・く・る	企画展「カガクの『?』をカタチにする展～疑問を探求するっておもしろい～」	12月21日～2025年2月16日
豊橋市自然史博物館	第20回自然史博物館自由研究展	10月26日～11月24日
	干支展 巳	12月14日～2025年1月19日
名古屋市科学館	ニンジャアカデミー	11月30日～2025年2月24日
滋賀県立琵琶湖博物館	湖底探検Ⅱ－水中の草原を追う－	7月20日～11月24日
京都鉄道博物館	山陽新幹線全線開業50周年記念企画展「山陽新幹線50年展」	10月5日～12月15日
大阪市立科学館	企画展「日本の科学館は大阪から」	8月1日～11月24日
	企画展「万博で夢見たサイエンス展」①	12月6日～2025年1月26日
高槻市立自然博物館 (あくあびあ芥川)	企画展「あくあびあと私 ～30年間の足あと～」	10月5日～2025年1月26日
きしわだ自然資料館	特別展「海のめぐみをいただきます!」	11月2日～2025年1月13日
明石市立天文科学館	SSP展「自然を楽しむ科学の眼」	10月19日～12月1日
鳥取県立博物館	企画展「ネコ～にゃんと!クールなハンターたち～」	10月5日～11月10日
	企画展「幕末土佐の天才絵師 絵金(えきん)」	11月30日～2025年1月13日
島根県立三瓶自然館	期間展示「わいるどらいふっ!展 4コマで知る身近な野生生物」	10月26日～12月8日
	企画展「自然を楽しむ科学の眼」	12月21日～2025年1月26日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「島田和一貝類コレクション展 11 島田和一が採集していた岡山県の絶滅危惧種7」	10月12日～2025年3月23日
	第32回しぜんしくらしき賞作品展	10月25日～12月4日
	「新着資料展」昆虫 竹中コレクション①	12月14日～2025年1月26日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	五感をとぎすませ あそぼう!感覚ワールド	7月20日～11月4日
広島市交通科学館	秋季企画展「あっと感動!乗り物あーと」	10月11日～12月1日
徳島県立あすたむらんど 子ども科学館	夜の科学館2024～光と謎と宝石さがし～	11月30日～12月29日
面河山岳博物館	真・カプトムシ	7月20日～11月24日
愛媛県総合科学博物館	企画展「未来の原画展」	10月5日～11月27日
	企画展「石のワンダー」	12月7日～2025年2月2日
佐川地質館	特別展「洞窟に落ちた動物たち」	5月18日～2025年5月5日
北九州市立自然史・歴史博物館	企画展「貫の歴史と文化財－真光寺大般若経とその周辺－」	9月21日～11月24日
	秋の特別展「お菓子のむかしばなし展」	10月12日～12月8日
	企画展「調べる・くらべる、地域とくらしと道具のうつりかわり」	11月30日～2025年3月23日
福岡市科学館	特別展「毒」	10月11日～2025年1月13日
佐賀県立宇宙科学館	デジタル×スポーツ展	10月19日～12月8日
熊本県博物館 ネットワークセンター	くまもとの大地の成り立ち ～その10年間の記録～	11月11日～2025年2月2日
宮崎県総合博物館	「化石タイムカプセル－コンクリーションの謎をとく－」	10月12日～11月24日

※次号(1月号)に掲載の1月2月の特別展情報は11月22日(金)までにお寄せください。

リニューアル情報

※次号(1月号)に掲載のリニューアル情報は11月22日(金)までにお寄せください。

大阪市立科学館

[更新箇所] 展示場4～1階、地下1階ツアイス広場

[更新内容] 今回のリニューアルは、「他にない、みんなで、科学を楽しむ、快適空間の構築をめざして」をスローガンに進めたもので、1989年の開館以来、35年ぶりとなる展示場全体の改装です。展示場4階に大阪と科学のかかわりについて紹介するコーナーを展開し、当館の前身で日本初の科学館でもある、大阪市立電気科学館の再現展示や学天則、大阪での物理研究など、地元大阪ならではの展示がパワーアップしました。また、1階にはワークショップなどをとおして、科学館スタッフとコミュニケーションをとりながら、みんなでいっしょに科学を楽しめるスペースを新設しました。その他にも「本物、実物、生の現象」にこだわった展示構成で、大人から子どもまで、科学技術に親しみ、科学をさらに身近に感じられる体験広場へと生まれ変わりました。

<フロア構成>

■4階「科学の探究」

大阪の科学技術への寄与を紹介する「大阪と科学」エリア、歴史的な実物資料と体験展示が融合した「科学の歴史とあゆみ」エリアなど、科学の発展による現在の成果とこれからの科学技術を体験できます。

■3階「物質の探究」

身の回りを彩る「モノ(物質)」を原子分子や化学結合といった化学の視点で紹介するほか、新素材の開発が実現する社会を紹介するなど、「モノ」を知り「モノ」を楽しむフロアです。

■2階「みんなでたのしむサイエンス」

「ボールがころがる」「鏡にうつる」「風がふく」「音がなる」「磁石にくっつく」の5つのエリアで構成し、身近な現象の不思議を直観的に体験し、楽しむことができます。

■1階「みんなのサイエンス・ラボ」

企画展やワークショップのスペースを新設。多様な来館者の興味・関心に合わせた科学体験の場を提供し、来るたびに新しい科学の話題に出会えます。

■地下1階 ツアイス広場

東洋初のプラネタリウム「カールツァイスⅡ型投影機」や関連の実物資料を見ながらゆったり過ごせる、カフェもある広場です。

[更新面積] 3,999㎡

[公開日] 2024年8月1日

[準備期間] 2021年度からリニューアルに向けた準備を進め「展示改装基本構想」を策定、2022年度に「大阪市立科学館展示改装基本計画」を策定しました。2023年11月6日(月)から全館休館し、新展示場の設計、展示製作、施工を進めました。

[担当者] 株式会社 丹青社

こころを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

 **Tanseisha**

空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL_03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

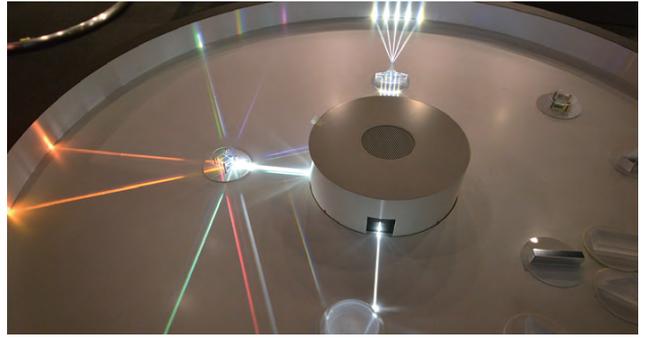
TEL_03-3350-6725 FAX03-3350-6745
http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science



展示場4階「学天則」



展示場4階「光のとおり道」



展示場3階「素材の重さくらべ」



展示場3階「ガラスと水晶を見分けよう」



展示場2階「じ石でつろう」



地下1階 ツアイス広場



展示場4階



展示場3階



展示場2階

KONICA MINOLTA Giving Shape to Ideas

DYNAVISION-LED
LED DOME SYSTEM

革新的なテクノロジーを結集した
新しいLED映像システムで
リアルな臨場感と美しい映像体験を

コニカミノルタプラネタリウム 製品 検索 画像: コニカミノルタプラネタリウム (満天) NAGOYA

Panasonic
CONNECT

ヒョウのハチ



高知みらい科学館公式HP
<https://otepia.kochi.jp/science/>

展示室の奥に佇むヒョウの剥製。戦時中、高知出身の兵隊なるおかまさひさだった成岡正久さんを中心に、部隊で愛し育てられた「ハチ」という名のヒョウです。激化する戦火の中、部隊と離れ、上野動物園で過ごしましたが、猛獣処分の命令により2年半の短い生涯を閉じました。

ハチが剥製となり80年以上の月日が流れましたが、これからもハチは、命や平和、人と動物の関わりなどについて考えるきっかけを、たくさんの人に与えてくれることでしょう。ぜひ会いに来てください。



次回執筆者は、愛媛県総合科学博物館 鈴木 裕司さんです。

第32回研究発表大会

事例発表者の募集について

令和7年2月13日(木)、14日(金)に兵庫県立人と自然の博物館にて開催する第32回研究発表大会での事例発表者を募集します。

今回のテーマは「博物館が提供する様々な経験—教育、楽しみ、省察、知識共有の観点から」です。活発な情報交換の場となるよう、自館の取り組みや課題などは是非ご紹介ください。

応募は口頭発表、ポスター発表とも11月5日(火)までに、事務局宛メールかFAXでお申込みください。

詳しくは、10月初旬に各加盟館宛に郵送しました募集要項をご覧ください(全科協HP<<https://jcs.jp/>>でも募集要項をご覧ください)。みなさまのご応募をお待ちしております。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)

南部 靖幸(熊本博物館学芸員)

西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団
所沢航空発祥記念館主査)

平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(特命参事))

弘田 澄人(川崎市青少年科学館(かわさき宙と緑の科学館)
天文担当係長)

望月 貴史(岩手県立博物館専門学芸員)

関根 則幸(国立科学博物館学習支援部広報・連携課長)

全科協事務局

国立科学博物館

学習支援部 広報・連携課
(担当:中山・斉藤・清水)

TEL 03-5814-9171 FAX 03-5814-9898
info@jcs.jp

発行日 2024年11月1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718

台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 株式会社セイコー社